
STUDY ONE

～中学生の学習支援～

第1章 プロジェクトの概要など

1. プロジェクトの名称、目的など

「STUDY ONE～中学生の学習支援～」

中学1、2年生を中心に、進路実現をサポートするための学習支援と子どもたちが安心して学習できるような空間、居場所作りを展開し、「子どもの貧困」という社会問題に関する理解を深めることを目的とする。

2. 代表者および構成員

・代表者

山本伊歩希 社会領域専攻 2回生

・構成員

金原早希 社会領域専攻 4回生

下田馨介 社会領域専攻 4回生

中川優佑奈 社会領域専攻 4回生

宮島孟史 社会領域専攻 4回生

安永和貴 社会領域専攻 4回生

山下穰大 社会領域専攻 4回生

福島嵯都 理科領域専攻 4回生

廣田葉月 教育学専攻 3回生

鍋島圭 教育学専攻 3回生

松田健 教育学専攻 3回生

天野小春 国語領域専攻 3回生

岡田蔭しいな 国語領域専攻 3回生

阪本萌菜美 国語領域専攻 3回生

酒井彩花 社会領域専攻 3回生

藪下瞬 数学領域専攻 3回生

松本和樹 技術領域専攻 3回生

根岸亮太 教育学専攻 2回生

岩井愛子 社会領域専攻 2回生

矢野詩織 社会領域専攻 2回生

堀尾泰伽 英語領域専攻 2回生

村松良磨 英語領域専攻 2回生

石垣元陽 数学領域専攻 2回生

森實康太朗 理科領域専攻 2回生

六車楓瑚 発達障害教育 1回生

3. 助言教員

神代健彦先生（教育学科）

中村瑛仁先生（教育学科）

第2章 内容や実施経過など

1. 放課後学習支援教室 STUDY ONE

(1) 活動概要

時間：毎週金曜日 18：00～20：00

場所：伏見いきいき市民活動センター

対象：中学生

(2) 活動目的、内容

放課後学習支援教室は、中学生の学習支援、居場所支援を目的としている。支援を必要とする中学生に支援が行き届くように藤森中学校との連携を行うとともに、中学生の実態に合わせた多面的・多角的な支援を行うための情報共有を行ってきた。

現在の登録者は中学3年生2名2年生1名、1年生2名の5名である。中学生への連絡は公式LINEを通して行っており、毎週活動日の前には活動の告知を行った。また、中学生が大学生に質問したり、活動になかなか来ることができていない中学生に連絡したりするなど、中学生との繋がりを保つためにも活用した。

今年度は、毎回の活動には3名程度の中学生が参加しており、学校の宿題に取り組んだり、教科書や団体で所有する参考書などを用いて中学校の授業の復習を行ったりして活動時間を過ごしている。中学生が分からない部分については大学生がルーズリーフを活用して演習を行ったり、勉強時間と休憩時間の配分や学習方法について助言をしたりするなど、中学生の学習支援につながるようなサポートを行った。

学習支援のみならず、中学生の居場所支援も行ってきた。STUDY ONEで、家族や友人、教員などとは別のつながり、大学生という中学生にとって年

年齢が近い学生との結びつきや、学校でも家庭でもない居場所があるということが中学生にとっての安心感につながるように、トランプなどのカードゲームを行ったりもした。このような活動を行うことで、コミュニケーション能力も身につけていたように思える。

中学生の帰宅後には、学生間で中学生についての情報共有を行い、構成員全員で中学生を見守り、関わるようにした。

2. 研究活動

(1) 研究活動

「子どもの貧困について」、「学習支援・居場所支援について」という二つのテーマで研究活動を行った。グループ分けをし、それぞれのグループが研究テーマについて様々な文献を用いて資料を作り、発表を行った。

(2) 他団体への視察

「みらい食堂」、「カーヤ子ども食堂」への視察を行った。

令和6年11月17日に、「みらい食堂」に伺った。活動は、京都市の職員や図書館司書の方など公的な機関に携わる方々や活動場所である醍醐いきいき市民活動センターの方々の協力を得て行っている。運営側として、大学生がいた。彼らは参加者とも交流していた。他にも、参加者兼運営側として来られている方もいた。時には、他国の方の協力を得て、その国の特性や文化を紹介してもらい、その国の伝統料理を食べてもらうという活動もあった。活動の始まりは、孤立している親子を助けたいという考えから始まったが、活動を計画していく上で、対象を限定することにより各家庭の特性が明らかになってしまう可能性が考えられたため、どのような親子でも来られるような場所となった。コンセプトは地域の食材を紹介し食べてもらう→家でも作れる料理を作る食堂であった。親子の交流の機会や参加者同士の交流の機会とした“居場所づくり”を第一に大切にしている。他にも、日常生活で必要な力を身につけるということも大切にしているように見られた。「食事以外の活

動（今回であれば読み聞かせ）＋食事」というように2つの活動に大きく分けることができる。そしてこれらには、「導入と展開」のような活動に繋がりがあった。

令和6年11月29日に、「カーヤ子ども食堂」に伺った。「カーヤ子ども食堂」は京都スパイスカレー KAYYA で開催されている。毎週第4水曜日はカレーの日、毎週金曜日はおやつ時間が設定されており、「いまを生きる勉強会」の開催、ブックシェアリングなどを行っている。「子どもたちに温かい手作りの食事をおなかいっぱい食べてほしい」といったことを理念としている、誰でも利用できる場を開いている。当日は、金曜日のおやつ時間に來た小学生の様子を見たり、代表の木村絢香さんの話を伺ったりすることができた。

(3) 勉強会

子どもの貧困についての更なる理解、放課後学習支援教室の質の向上などを目的とした勉強会を行ってきた。また、学年や専攻の違う大学生同士の結びつきのための交流も兼ねている。

以下、実施日時・内容

第1回（6月21日）自己紹介と本年度の方針の確認
第2回（9月8日）STUDY ONEをより良い団体にするためにできることは何か

第3回（10月13日）新規生を迎えるにあたって
第4回（10月18日）視察先について・視察に関する諸注意

第5回（11月17日）研究・探究活動について
第6回（11月22日）視察一次報告①みらい食堂
第7回（12月1日）視察一次報告②カーヤ子ども食堂

第8回（12月20日）中学生の募集方法について
第9回（12月22日）視察成果発表会に向けた班活動

第3章 結果や成果など

1. 放課後学習支援教室 STUDY ONE

今年度は、活動に参加する大学生、中学生が少なく、お話をする機会も少なかったため、小さい部屋で活動を行った。

また、昨年度に引き続き担当制を用いたが、中学生の二ーズに合わせて違う大学生がサポートに入ったり、担当する大学生を複数名にして様々な大学生と関わりを持つことができるように工夫した結果、中学生が自ら積極的に大学生と関わろうとする姿が見られた。さらに、継続して活動に参加する中学生も増え、中学生にとって来たい場所になっているのではないかと感じた。

今年度は、中学3年生も登録はされていたが、活動に来ていたのは中学1、2年生のみであった。勉強の時間を少しずつ長くしていくことで中学3年生での受験のための勉強習慣を身に付けるよう促した。中学生が帰宅した後は、中学生の様子についての共有や大学生自身の教え方や接し方についての振り返りを行った。疑問に思ったことや困ったことについても共有し、全体の課題として考え、意見交流を行うこともできた。

中学生の様子についての振り返りをノートに書くということを昨年度に引き続き行ってきた。特に今年度では、昨年度のノートの書き方が統一されておらず、見にくいという反省をいかし、ノートの書き方を統一し、スムーズな情報共有につなげることができた。

2. 研究活動

(1) 研究活動

「子どもの貧困について」、「学習支援・居場所支援について」というテーマで研究活動を行い、発表を行った。

「子どもの貧困について」では、絶対的貧困と相対的貧困についての確認から、日本で問題となっている相対的貧困について考えた。貧困線に満たない家庭があるということやその家庭で育つ子どもが感じている困りや問題点について研究を行うとともに、子どもの貧困の影響について、教育格差と虐待を挙げ、子どもたちに関わる立場にあるからこそできることについて考えた。

「学習支援・居場所支援について」では、「すき間

の子どもの支援」、「学習・居場所支援事業」、「居場所支援のやり方」という4つのテーマに注目し、研究を行った。困りを抱える子どもへの対応や子どもたちの学習にとって必要なこと、グレイゾーンにある子どもの心の中の貧困などについて考えた。一人一人異なる個性や背景を持つ子どもと接し、成長に関わっていくということについて考えることができた。

3つ目に学習意欲を促進するための方法について考えた。カードゲームなどの遊びに学習的要素を取り込むことで、本質的な理解ができると考えた。またこのような遊びによってコミュニケーション能力の向上も見られると考えた。

(2) 他団体への視察

「カーヤ子ども食堂」では、子どもにとって安心できる場所作り、困りを抱えている子を見逃さないということなどについて学ぶことができた。食堂は誰でも利用できる場であるからこそ、食堂に通っていることを理由としたいじめの発生につながらないようにしているのではないかと考えた。また、子どもだけでなく、その保護者ともコミュニケーションを積極的にとることで信頼や安心感につながるような工夫が見られた。ブックシェアリングは、生徒に本を読む機会を提供することにつながるかもしれないので、STUDY ONEにも導入を検討したい。また、保護者の信頼の獲得ということについて考える機会も得ることができた。

「みらい食堂」では、日常生活で交流が少ない親子の交流の場として機能していた。「活動による学び」を進めていくために活動の選び方やその活動における注意点などを学ぶことを目的として視察させていただいた。学んだこととして、学ばせたいことを直接行うのではなく、導入を入れることにより、活動外での学びの推進にも繋げることができることを学んだ。またこれらの活動を自分たちの活動に落とし込むと、カードゲームなどのゲームに学習内容を取り入れることで導入とし、学習内容につなげることができると考えた。導入（学習内容を含んだゲームなど）→学習内容→日常生活への応用という流れでやっていくことが大切だと考えた。

(3) 勉強会

現在行われている政策や活動について学ぶ、STUDY ONE をよりよい団体、活動にするためにどのようなことが必要か話し合うなどといったことを2週間ごとに勉強会で行ってきた。

今年度の活動に参加した中学生の中には、特性を持った中学生がいたため、その中学生に対する対応の仕方を考え合った。他にも進路に悩んでいる中学生に対して提案を考えたり、学習支援をする上での悩みについて話し合ったりした。

このように活動に関して不安があることについて学ぶ機会を設けたり、問題点や課題点などについて話し合ったりすることで、活動の質を上げ、より良い団体作りにつなげていくことができた。

第4章 まとめと反省、今後の展望など

今年度は中学生、大学生が共に少なかったため、勉強会での話し合いの回数が少なかったり、さまざまな意見を得ることができなかった。そのため新規構成員や新規参加者の積極的な獲得を目指していきたいと思う。そして、勉強会開催を恒例化することができていないため、更なる工夫について考える必要がある。

今年度は中学1、2年生が多く、中学3年生が極端に少ない状態になってしまっていることも課題として挙げられる。中学3年生が少ないことで、構成員の受験生への対応や学習支援力の強化が促進されなかったため、藤森中学校との連携の強化とともに、中学生にとってより成長できる環境を作ることできるようにしていきたい。

中学生の学習面での成長に注目すると、活動に参

加していくにつれて、学習意欲が強くなる中学生が多かった。学習よりも遊びを長く行っていた中学生も、最近になると活動時間全てを学習の時間に充てるようになった。落ち着きが見られなかったりした子も、自ら学んだり、集中して取り組む姿に成長を感じられる場面が増えてきた。よりよい支援のために、中学生のニーズに合わせた環境作りに励みたい。

また、貧困や支援に関する研究活動や他団体への視察、勉強会など、大学生の知見を深め、活動をより発展させていくための活動を数多く行うことができた。研究や視察を通して得た学びや気づきについて発表し、共有することで、構成員全員がよりよい団体作り、活動について考えることができた。様々なことを学び、視野を広げることで、団体の良いところはもちろん、改善点などに気づき、中学生にとって安心できる居場所作りを考える機会を得た。担当制を緩め、柔軟な対応ができるようにする、中学生の学習支援のための大学生の勉強会を行うなど、活動を改良、更新していくための取り組みを行うことができた。来年度は今年度新しく始めた取り組みの是非を見極め、更新していき、よりよい中学生のための支援の方法について考えていきたい。